

第20回(2009. 8. 2 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「8月は八朔」

八朔(はっさく)といっても、柑橘類のことではない。朔というのは、月の最初の日をいうから8月1日のことである。この日は、夏の終わりを意味し秋の訪れを告げる農家の大切な行事として、昔から収穫を祈願する八朔祭があるが、そのほかにもいろいろな行事が行われる。

旧暦の8月の行事だから、現在では9月1日に行くところが多いのだが、そもそもは初穂を宮中に献上したことから始まった稲の実りを祈願する祭である。元は宮中の行事だったが、江戸時代になって徳川家康が天正18年(1590)8月1日に江戸城に入城したことを記念して、正月に次ぐ祝日として盛大な祭が各地で始まり、たんなる農業だけの祭ではなくなってしまった。

余談だが、昭和天皇が皇居内に水田を造られ、日本の農耕文化の中心である稲作をおはじめになったが、今上陛下もその行事を引き継がれて、水田に入って種籾撒きや田植え、そして稲刈りなどをされておられる。皇后陛下も、やはり皇居内の紅葉山で、昭憲皇太后が始められた養蚕を引き継がれて、掃き立てや給桑、上族・繭かきなどをされておられる。雲竹齋も、大学に在学中、紅葉山の御養蚕所へ奉仕に行ったことがある。大学を卒業して群馬県の製糸工場に勤めたが、その工場の製糸機械よりも新型の製糸機械が御養蚕所に入っていたのを覚えている。ちなみに、大学で実習に使っていた製糸機械は、当時でさえ博物館にしか置いてなかった代物だったから、さすがは宮内庁だと思ったものだ。

またまた余談だが、国際協力事業団(現国際協力機構)は8月1日が創立記念日で特別休暇がもらえて嬉しかったものである。当時の庶民も、祝日はさぞ嬉しかったと思う。うがった見方をすれば、昔の庶民、特に農民は非常に厳しい生活を強いられていたから、季節の節目に心身を休めて疲れを取る工夫が、祭という形でなされていたのかもしれない。

この日、京都では芸舞妓さんたちが、お茶屋の女将さんや芸事のお師匠さんを訪ねて、挨拶回りをする風習がある。これには黒い紋付き姿で、「よろしゅう、おたのもうします」、「おめでとうさんどす、おきばりやす」などと挨拶を交わす。また、江戸の吉原では、遊女たちは全員白無垢の打ち掛けを纏って祝ったが、これは白が身を清める色を意味したのからきたと思われる。ちなみに、江戸時代の「遊女」は売春婦のことだが、もとは「踊り子」や「歌い手」の女性たちを指していた。

「芸者」とは、宴会の席で歌や踊りなどを披露し、座を取り持つ女性で、明治以降は芸妓とも呼ばれているが、関西では「芸子」、半玉は「舞妓」と呼ぶ。芸者は、「芸達者」からきた言葉だという説がある。芸者は、武芸者にも通じるから、本来は三味線や踊りだけでなく教養も高い人を「芸者」といったようである。芸者を呼んで遊ぶことは、江戸時代中期あたりから盛んになったが、遊郭で遊女が来るまでの間芸者が呼ばれることも多く、したがって遊郭の多かった場所に、料亭や茶屋も多く、芸者も多かった。そこで、芸者は遊女と区別するために、花魁のように右手ではなく左手で着物の褌をとるので、「左褌(ひだりづま)」とも呼ばれたが、これは「芸は売っても身体は売らない」という心意気を表したものだという。褌とは、着物の襟から裾にいたる縁の下の方をいう。また、吉原芸者の「派手」に対して、「粋」を売りにして、冬でも素足で、もともと男が着る羽織を身につけたことから、「羽織芸者」とも呼ばれていた深川芸者が有名だが、深川は、江戸城の辰巳(たつみ)の方角(南東)に位置していたから、「辰巳芸者」とも呼ばれた。

昔の芸者は、若い内から「長唄(ながうた)」や「清元(きよもと)」などや三味線、太鼓などを覚えさせられ、一通りの芸ができるまで「半玉」と呼ばれる見習い期間を経て座敷に呼ばれるが、一本

立ちするには各種の稽古事や衣装などに多額の金額が必要で、「旦那」と呼ばれるパトロンが不可欠だった。

芸者を茶屋や料亭などに差し向ける店を「置屋」といった。客は、茶屋などを通して置屋に指名をかけ、「揚屋」という専門の料亭や、あるいは船宿などへ呼んで遊ぶが、芸者を一定の時間を決めて呼ぶ際には、料金のことを「玉代」または「線香代」といった。関西では「花代」というが、線香代とは、一本の太い線香が燃え尽きるまでの時間の料金だったからだという。

遊女の語源は、客を遊ばせるからだという説や、旅(遊行)をしながら暮らしていたからという説もある。遊女の起源は、奈良、平安の頃における神仏一致の遊芸による伝播だというが、古代日本では、男女の貞操観念が極めて低かったことから、性行為を商品化する女性が出現し、遊芸や教養を高めて、遊女としての地位を確立していったのではないと思われる。源義経で有名な「静御前」や、「祇王、妓女」などの「白拍子(しらびょうし)」も遊女だが、自称出雲大社の巫女「阿国(おくに)」が始めた「阿国歌舞伎」が人気を集め、女歌舞伎が流行して、彼女らが売春するようになって、幕府が風俗を乱すとして禁止したこともあった。

近世になると、官許の遊女屋が出現する。三大遊郭として有名な「江戸の吉原」や「京都の島原」、「大阪の新町」(あるいは「長崎の丸山」)はじめ、全国に官許の遊郭が存在した。また、各宿場にも「飯盛女(めしもりおんな)」と呼ばれる娼婦がいた。こういった遊女を斡旋する遊女屋が、「廓(くるわ)」、「遊郭(ゆうかく)」という名前で登場するのは、官許の遊女屋が現れてからのことである。

遊女という呼称は一般的な呼び名であって、「傀儡女(くぐつめ)」、「白拍子」、「上臈(じょうろう)」などの名称から、「花魁(おいらん)」、宿場の「飯盛女」、銭湯の「湯女(ゆな)」など時代や場所によって名称も異なっていた。遊郭では稼ぎや容色によって階級がつけられ、上級遊女は「太夫(たゆう)」と呼ばれ、花魁と呼ばれる身分で、この遊女を買うには大金を払わなければならなかったから、庶民には花魁と遊ぶことは困難であった。

戦後、アメリカ軍が進駐してきて、GHQ(連合軍最高司令官総司令部)の命令で、遊郭は廃止されたが、「赤線」と名称を変えただけだった。昭和33年(1958)「売春禁止法」の施行によって遊女は消滅した。しかし、「トルコ風呂」という形で復活し、この非合法営業はその後名称を変えながら現在に至っている

現在の京都や東京の舞妓、芸子さんたちとは違い、昔のこういった職業の人たちには暗い悲しい歴史があった。そんな過去の歴史を振り返りながら、八朔祭の勇壮な太鼓や踊りを見物しても、もの悲しく感じられて、祭より柑橘類のハッサクの方がいいや、という気持ちになる。どうも雲竹斎は人生に疲れてきたのかもしれない。芸子さんや舞妓さんとお座敷で差しつ差されつしながら、「おきばりやす」などと言われれば元気が出るのだろうが、懐も寂しい昨今、しょせん無理な話である。